

# 日本気象学会 2007年度春季大会

会期：2007年5月13日（日）～16日（水）

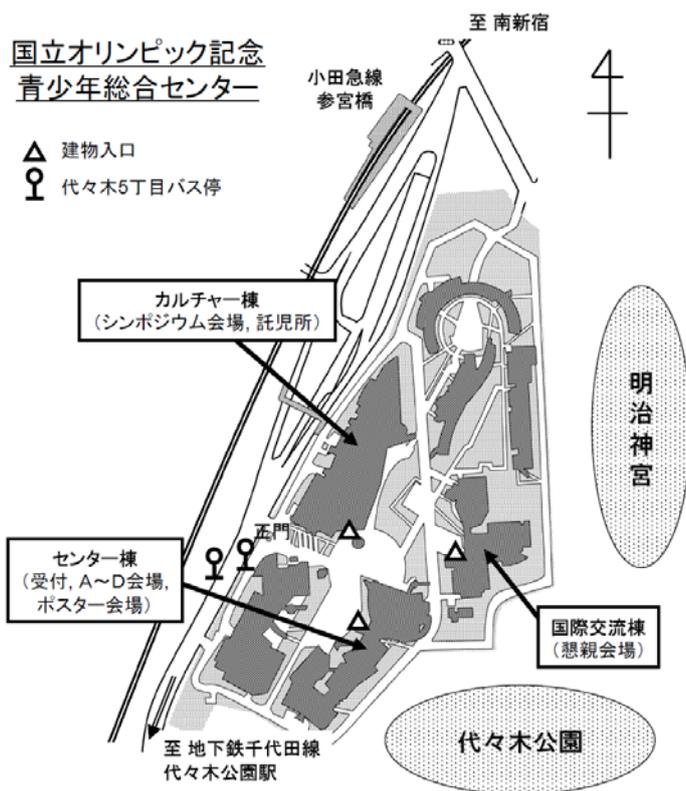
会場：国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区代々木神園町3-1）

大会実行委員会担当機関：東京大学気候システム研究センター

大会委員長：中島映至（東京大学気候システム研究センター）

当日の会場への連絡先：大会実行委員会事務局（会議室405）  
TEL 090-6506-7784（直通）（学会開催期間のみ有効）  
※大会参加者への伝言は、受付付近の掲示板に掲示します。  
取り次ぎはいたしませんのでご承知おきます。

## 会場案内図



### [交通手段]

○小田急線：

「参宮橋」駅下車 徒歩7分

○地下鉄千代田線：

「代々木公園」駅下車 徒歩10分

○京王バス：

1. 新宿駅西口16番より「代々木5丁目」下車

2. 渋谷駅西口14番より「代々木5丁目」下車

# 大会行事予定

A会場 : セミナーホール417 (センター棟 4F)  
 B会場 : 会議室309 (センター棟 3F)  
 C会場 : 会議室310 (センター棟 3F)  
 D会場 : 会議室311 (センター棟 3F)

125周年記念式典・総会・記念講演・シンポジウム  
 : 大ホール (カルチャー棟)

ポスター会場 : 会議室401,402 (センター棟 4F)

企業展示会場 : 会議室401,402 (センター棟 4F)  
 受付 : 会議室416 (センター棟 4F)  
 大会事務局 : 会議室405 (センター棟 4F)  
 懇親会 : レセプションルーム (国際交流棟)

		A会場	B会場	C会場	D会場
5月 13日 (日)	10:00～ 11:30	相互作用 ( 6, A101～A106)	専門分科会 ( 5, B101～B105) 「可搬型気象レーダー の現状と将来展望」I	エアロゾル ( 5, C101～C105)	専門分科会 ( 4, D101～D104) 「チベット高原気象学 の進展」I
	11:30～ 12:30	ポスター・セッション (46, P101～P146)			
	13:30～ 17:00	公開気象講演会	専門分科会 ( 9, B151～B159) 「可搬型気象レーダー の現状と将来展望」II	専門分科会 (9, C151～C159) 「大気リモートセンシ ングデータ解析技術 における工夫」	専門分科会 (12 D151～D162) 「チベット高原気象学 の進展」II
5月 14日 (月)	09:30～ 11:30	気象予報I ( 8, A201～A208)	竜巻 ( 9, B201～B209)	微量気体 ( 9, C201～C209)	大気力学 ( 8, D201～D208)
	11:30～ 12:30	ポスター・セッション (45, P201～P245)			
	13:30～ 14:30	日本気象学会125周年記念式典			
	14:30～ 16:00	総会			
	16:00～ 18:00	学会賞・藤原賞受賞記念講演			
	18:00～ 20:00	懇親会			
5月 15日 (火)	09:30～ 11:30	気象予報II ( 8, A301～A308)	降水システムI ( 9, B301～B309)	大気境界層I ( 8, C301～C308)	中層大気 ( 7, D301～D307)
	11:30～ 12:30	ポスター・セッション (45, P301～P345)			
	13:30～ 17:30	日本気象学会125周年記念国際シンポジウム「次世代の大気科学に期待すること」			
5月 16日 (水)	09:30～ 11:30	気候システムI ( 8, A401～A408)	降水システムII ( 8, B401～B408)	大気境界層II ( 7, C401～C407)	台風 ( 8, D401～D408)
	11:30～ 12:30	ポスター・セッション (45, P401～P445)			
	13:30～ 17:00	気候システムII (15, A451～A465)	雲物理 (14, B451～B464)	気象教育 ( 2, C451～C452) 観測手法 (13, C451～C463)	熱帯大気 (15, D451～D465)

発表件数 : 387件 (専門分科会39, 口頭発表167, ポスター181)

当大会予稿集に掲載された研究発表の文章・図表を複製あるいは翻訳して利用する場合には、日本気象学会の文書による利用許諾を得た上で出所明示して利用しなければなりません。ただし著作者自身による利用の場合は、利用許諾の申請は不要です。

本プログラムの記載内容に関する問い合わせは、〒305-0052茨城県つくば市長峰1-1気象研究所予報研究部内 講演企画委員会 (e-mail:kouenkikaku2007s@mri-jma.go.jp) まで。

## 講演の方法

### 一般口頭発表・専門分科会

- ・ 一般口頭発表の講演1件あたりの持ち時間は13分（講演10分・質疑3分）です。
- ・ 専門分科会の各講演の持ち時間は分科会毎に決められています。詳細は各分科会のプログラムをご覧ください。
- ・ 講演にはPCプロジェクターとOHPが使用できます。
- ・ 止むを得ない事情で使用機器が講演申込時に予め届け出ていた機器と異なる場合は、セッション開始前までに座長と会場係にその旨を申し出て下さい。
- ・ PCプロジェクターを使用する際は予め以下の点をご了承ください。
  - ✓ パソコンは各自で準備して下さい。会場にはプロジェクターおよび接続ケーブルのみを準備します。
  - ✓ セッション開始前の休憩時間などを利用して、必ず接続の確認を行っておいて下さい。また接続が不安な場合は、セッション開始前に会場係に申し出て下さい。
  - ✓ 突然の故障や接続の際のトラブルが発生した場合、座長の判断で発表順の繰り下げなどの対応することが

あります。また、場合によってはOHPによる発表に切り替えさせて頂くこともあります。携帯用メディアによるバックアップファイルの準備やOHPシートの準備など、トラブルへの備えは講演者自身で行って頂くようにお願いします。

### ポスター発表

- ・ 講演者はポスターに表題と著者名を明記して下さい。
- ・ ポスター発表の一人当たり使用可能面積は、縦150 cm×横180 cmとなっています。
- ・ ポスターの掲示にあたって鋏、ピンが使用できますが、糊、テープ等は使用できません。必要な鋏、ピンは各自で用意して下さい。
- ・ ポスターの掲示可能時間は発表日の09:30-16:30となっています。会場の都合上時間厳守をお願いします。
- ・ ポスター会場での機器の使用は講演申し込み時に申し出ていたもの以外は原則として認められません。

## 日本気象学会125周年記念国際シンポジウム 「次世代の大気科学に期待すること」

Toward the Next Generation of Atmospheric Sciences

日時：大会第3日（5月15日）13:30～17:30

会場：国立オリンピック記念青少年総合センター 大ホール（カルチャー棟）

司会：中島映至（東京大学気候システム研究センター）

### 趣旨：

新世紀、気象学会125周年、計算機・衛星テクノロジーの大飛躍に鑑み、次世代の大気科学に期待することを、モデリング、観測、解析研究のベテラン、若手に自由に語っていただき、会員諸氏とともに今後の気象研究の展開に思いを馳せる。

### 基調講演：

Dr. Guy Brasseur（National Center for Atmospheric Research, USA） Modeling Earth System Interactions

Dr. Brian Golding（Met Office, UK）

Future Forecasting

上田 博（名古屋大学地球水循環研究センター）

次世代降水系観測が拓く新しい気象学  
Next Generation Observations on Precipitation System

増永浩彦（名古屋大学地球水循環研究センター）

次世代地球観測衛星を用いた気象学研究の展望  
Prospective Meteorological Studies Using Next-Generation Earth-Observing Satellites

植田宏昭（筑波大学大学院生命環境科学研究科）

気候研究におけるデータ解析の意義と今後の課題  
A Climatological Perspective on Achievements and Problems of Data Analysis

### 総合討論

# 日本気象学会125周年記念式典

日時：大会第2日（5月14日）13:30～14:30

会場：国立オリンピック記念青少年総合センター 大ホール（カルチャー棟）

## 式次第

- |         |          |
|---------|----------|
| 1. 開式の辞 | 4. 祝電披露  |
| 2. 式辞   | 5. 感謝状贈呈 |
| 3. 来賓祝辞 | 6. 閉式の辞  |

---

## 総 会

日時：大会第2日（5月14日）14:30～16:00

会場：国立オリンピック記念青少年総合センター 大ホール（カルチャー棟）

## 議事次第

- |                 |                  |
|-----------------|------------------|
| 1. 開会           | 8. 2006年度監査報告    |
| 2. 議長選出         | 9. 理事の辞任に伴う後任の選任 |
| 3. 理事長挨拶        | 10. 2007年度事業計画案  |
| 4. 2007年度学会賞授与  | 11. 2007年度収支予算案  |
| 5. 2007年度藤原賞授与  | 12. その他          |
| 6. 2006年度事業報告   | 13. 議長解任         |
| 7. 2006年度収支決算報告 | 14. 閉会           |

---

## 専門分科会の概要紹介

2007年度春季大会では下記の通り、3件の専門分科会が開かれます。

### 可搬型気象レーダーの現状と将来展望—小規模じょう乱から気候変動の観測まで—

日時：大会第1日（5月13日）10:00～11:30, 13:30～17:00

場所：B会場

趣旨：毎年、様々な観測機器を駆使した大規模な観測プロジェクトが国内外で活発に行なわれています。その観測ツールの中核を担ってきたのが、降水現象を観測する可搬型気象レーダーです。可搬型気象レーダーの対象は、竜巻やダウンバーストのような小規模じょう乱から、積乱雲、台風、梅雨前線、海上の降雪雲など、多岐にわたります。さらに最近では、熱帯の対流雲を気候変動の励振源として着目し、その長期変動を観測する試みも始まっています。そこで、可搬型気象レーダーに関する最新の観測事例やその成果について情報交換を行うことを目的に、表題の専門分科会を企画しました。可搬型気象レーダーにより、何が明らかになり、どんな新事実が発見されてきたのか。これから今後どのような役割が期待されるのかをみんなで議論します。また、可搬型気象レーダーは様々なノウハウを必要とする大掛かりな観測装置です。レーダーの開発、改造、運用、何がポイントで何が重要なのか、検証したいと思います。

コンビーナー：楠 研一（気象研究所）、上田 博（名古屋大学地球水循環研究センター）、牛山朋来（海洋研究開発機構地球環境観測研究センター）、小林文明（防衛大学校）、真木雅之（防災科学技術研究所）

### 大気リモートセンシングデータ解析技術における工夫

日時：大会第1日（5月13日）13:30～17:00

場所：C会場

趣旨：近年、衛星搭載センサーや地上リモートセンシング技術の向上により、これまで検出が難しかった新たな大気物理量の抽出が可能になりつつある。これらは単に検出器の技術的な向上のみならず、データ解析手法における様々な工夫が為し得たものである。あるものは統計的手法の最適化で対象物を選択的に抽出したり、またあるものは一つの物理量を加えることで識別が難しかった2つの物理量の分離が可能になったりと、他分野での応用の可能性も秘めるキー技術を用いている。本分科会は、このようなリモートセンシングデータの解析技術について、“なるほど”と思われる工夫を紹介しあい、基本技術や観測対象の異なる研究者間で、新たな工夫や応用に繋げるための情報交換の場としたい。

コンビーナー：今須良一、齋藤尚子（東京大学気候システム研究センター）、笠井康子（情報通信研究機構）、杉本伸夫（国立環境研究所）

## チベット高原気象学の進展

日時：大会第1日（5月13日） 10:00～11:30, 13:30～17:00

場所：D会場

趣旨：チベット高原周辺の気象に関し、高原上昇に伴う周辺アジアの気候形成、熱力学作用に伴うアジアモンスーン循環への影響、地表面状態に応じた大気陸面過程、複雑地形による局地循環と降水の日変化、中緯度循環場との相互作用など、様々な角度から研究が進展している。近年は地上観測網や衛星観測データも整備され、シミュレーションや再解析データとともに、このような遠隔地における多くの物理過程が明らかになりつつある。本分科会では、従来各セッションで断片的に発表されてきたこれらの研究成果を“チベット高原・ヒマラヤ山塊”をキーワードとする同一セッションで横断的に議論することにより、様々な時空間スケール・地域性を有する現象の相互作用に関する理解を深め、チベット高原の大気循環場への影響に関する総合的な理解を目指す。

コンピーナー：上野健一（筑波大学大学院生命環境科学研究科）、里村雄彦（京都大学大学院理学研究科）、阿部 学（名古屋大学大学院環境学研究科）、栗田直幸（海洋研究開発機構地球環境観測研究センター）、佐藤友徳（東京大学気候システム研究センター）

---

## 公開気象講演会のお知らせ

※公開気象講演会への参加は無料・事前の申込も不要です。

日時：2007年5月13日（日）（大会第1日） 13:30～16:30

場所：大会A会場

趣旨：（社）日本気象学会が創立125周年を迎えるのを機に、一般市民の方々に、気象に関する最近の研究成果を分かりやすく解説することを目的とした、公開講演会を開催します。今回は、災害をもたらすことにより、私たちの生活に大きな影響を与える、激しい気象を取り上げ、その観測事実、発生要因、長期的変化傾向等について、中・高校生にも分かるよう、やさしく解説します。

テーマおよび講師：

1. 大雨の特徴と最近の傾向：藤部文昭（気象研究所）
2. 竜巻の謎を探る：新野 宏（東京大学海洋研究所）
3. 台風ー巨大な渦巻き：萬納寺信崇（気象庁太平洋台風センター）

問い合わせ先：古川武彦（気象コンパス） E-mail：takefuru@eos.ocn.ne.jp

---

## 研究会のお知らせ

何れも参加は無料・事前の申込も不要ですので、興味のある方はご自由にご参加下さい。

### 第28回メソ気象研究会

日時：2007年5月12日（土）（大会前日） 13:30～17:00

場所：気象庁講堂（東京都千代田区大手町1-3-4）

テーマ：「積乱雲の発達高度」

コンピーナー：加藤輝之（気象研）

内容：集中豪雨（水平スケール数十km）は、主に発達した積乱雲群（メソ対流系）によってもたらされる。また、熱帯域の発達した大量の積乱雲による大気中層の加熱は地球規模の大循環（水平スケール数千km）に大きな影響を与える。このようにスケールが3桁も異なる現象を考える上でも、5～15km程度のスケールしか持たない積乱雲が非常に重要な働きをしているのである。しかし、積乱雲の発達高度の決定は大気状態に依存するにもかかわらず、そのことについてはあまり議論されてこなかった。そこで、今回のメソ研究会では大気状態が異なる梅雨前線帯と熱帯域での積乱雲の観測や積乱雲に関わる解析・数値シミュレーションを取り上げる。その中で、積乱雲の発達条件についての議論を深め、今後の研究方向を探りたい。また、このような議論・研究は今後の新たな湿潤対流のパラメタリゼーションの開発や温暖化された大気状態でのメソ対流系の理解に役立つことが期待されている。その観点から、

温暖化時の積乱雲の発達高度についても考察する。

プログラム：

講演（講演時間30分＋質問5分）

1. 梅雨前線帯における積乱雲の潜在的発達高度について 加藤輝之（気象研）
2. 梅雨前線帯で観測された積乱雲の発達高度について 上田 博（名大地球水循環）
3. 積乱雲内の上昇流の特徴と大気状態との関連 牛山朋来（IORGC）
4. 安定度の違いによる積乱雲の組織化や発達高度への影響 竹見哲也（京大防災研）
5. 温暖化によって積乱雲の発達高度はどう変わるのか 金田幸恵（AESTO/気象研）

総合討論

世話人：坪木和久（名大地球水循環）、加藤輝之（気象研）、小倉義光（東大海洋研）

連絡先：加藤輝之（気象研） E-mail：tkato@mri-jma.go.jp

### 第3回気象庁数値モデル研究会

気象庁では、気象学の分野で用いられているさまざまな数値モデルに関する情報交換の場として、平成17年度から「気

象庁数値モデル研究会」を開催しています。今年度は、世界天気研究計画のもとで実施されている観測システム研究・予測可能性実験計画(THORPEX)の一環として構築されている全球マルチモデルアンサンブルデータセット(TIGGEデータセット)や、気象庁・海洋研究開発機構・千葉科学大学の共同研究の成果であるアンサンブル技術を用いた実験的全球解析データ(ALERAデータ)について、その概要・利用方法・利用例について取り上げる予定です。全球モデルに携わる方だけでなく、メソモデルを用いたダウンスケール実験などへの利用が期待できますので幅広い参加を期待いたします。詳しくは、数値予報研究開発プラットフォームのホームページ(<http://pfi.kishou.go.jp>)でもお知らせいたします。

日時：2007年5月12日(土) (大会前日) 17:30～19:30

場所：気象庁講堂(東京都千代田区大手町1-3-4)

話題および講演者：

「顕著現象予測のためのアンサンブルデータの利用」

TIGGEの概要(竹内義明 気象庁数値予報)

TIGGEデータセットの取得方法

(横井信太郎 気象庁数値予報)

TIGGEデータセットの利用例

(松枝未遠 筑波大院生命環境)

アンサンブル手法を用いたデータ同化

(三好建正 気象庁数値予報)

ALERAデータの公開と予測可能性研究への活用例

(榎本 剛 地球シミュレータ)

**注意事項(第28回メソ気象研究会および第3回気象庁数値モデル研究会共通)：**自家用車での来庁はご遠慮下さい。当日は閉庁日ですので、正面玄関(KKR東京側)のみ開いています。研究会の受付で名札を受け取り、着用してください。

問い合わせ先：気象庁総務部企画課 横山 博  
(気象庁モデル技術開発推進本部事務局)  
TEL：03-3212-8341 (内線2227)  
E-mail：[hiroshi.yokoyama@met.kishou.go.jp](mailto:hiroshi.yokoyama@met.kishou.go.jp)

## 惑星大気研究連絡会

日時：2007年5月12日(土) (大会前日) 13:30～18:30

場所：大会B会場

テーマ：火星研究の現状

内容：惑星大気研究会連絡会では、気象学会前日の午後、「火星研究の現状」と題して、火星大気科学に関する分野横断的勉強会を企画しています。最近の研究動向から最新の研究成果まで、講演者には十分時間をかけて説明して頂き(1件1時間程度)、討論したいと思っておりますので、専門家は勿論、興味をお持ちの幅広い分野の方々のご参加をお待ちしております。

プログラム(予定)：

- 「火星大気中のダスト循環」  
高橋芳幸(神戸大院理)
- 「Hellas盆地付近のダストの拡大、局在過程の考察」  
小郷原一智(京大院理)
- 「古火星大気の温暖化問題」  
光田千紘(北大学院理)
- 「火星地形からみる火星大気活動」  
栗田 敬(東大地震研)

世話人：松田佳久(学芸大)、阿部 豊(東大)、石渡正樹(北大)、今村 剛(JAXA)、岩上直幹(東大)、小高正嗣(北大)、高木征弘(東大)、中島健介(九大)、

はしもとじょーじ(神戸大)、林 祥介(神戸大)

URL：<http://wtk.gfd-dennou.org/>

連絡先：高木征弘(東大理)

TEL：03-5841-4285, FAX：03-5841-8791

E-mail：[wtk-staff@gfd-dennou.org](mailto:wtk-staff@gfd-dennou.org)

## 極域・寒冷域研究連絡会

日時：2007年5月13日(日) (大会第1日) 17:15～2時間程度

場所：大会B会場

話題：

- IPY(国際極年)2007-2008 について  
「IPY 2007-2008 大気科学プロジェクトー日本の貢献」  
山内 恭(極地研)
- 南極観測報告  
「2007年夏、昭和基地は国際空港だった」  
平沢尚彦(極地研)  
「南極の空を飛び回ったのだ」  
原 圭一郎(福岡大)

今回の極域・寒冷域研究連絡会は、極域観測についての特集です。まず、IPY(国際極年)2007-2008 の話題を提供して頂きます。IPYは、極域での様々な過程や、それらの地球全体への影響についての最先端の科学を追求するなどの目的を持った国際的な極域の科学計画です。2007年3月1日から2009年3月1日の間、南北緯度60度から90度の範囲で計画されています。このIPYについて、その歴史、今回のIPYの特色、日本の貢献について等の話題を提供して頂きます。後半では、今回の南極観測の夏隊で行われた観測について、実際に南極観測に携わった方々から、最新の成果を紹介して頂きます。

代表：山崎孝治(北大院地球環境)

世話人：平沢尚彦(極地研)、中村 尚(東大院理)、浮田甚郎(千葉大CEReS)、高田久美子(FRCGC)、阿部彩子(東大気候システム)、佐藤 薫(東大院理)、本田明治(FRCGC)、齋藤冬樹(FRCGC)、猪上 淳(IORGC)、高谷康太郎(FRCGC)

URL：[http://polaris.nipr.ac.jp/~pras/coolnet/cl\\_index](http://polaris.nipr.ac.jp/~pras/coolnet/cl_index)

問い合わせ先：高谷康太郎(FRCGC)

TEL：045-778-5526, FAX：045-778-5707

E-mail：[takaya@jamstec.go.jp](mailto:takaya@jamstec.go.jp)

## 第2回統合的陸域圏研究連絡会

日時：2007年5月13日(日) (大会第1日) 18:00～20:00

場所：大会C会場

内容：「統合的陸域圏研究連絡会」においては、陸面を中心とする大気境界層から土壌内に渡る陸域圏を研究の主な対象とし、そこにおける物理的、生物的諸過程の理解に向けた、広い視野に立った研究のための情報交換、陸域圏を対象とした基礎的なメカニズムの理解と、他の圏との広域的・長期的相互作用システムの解明、直接観測、間接観測、およびモデリングの融合、空間的・時間的スケール間ギャップの問題の解決への方向性の探求、正確な現状の認識と、実質的に意味のある手法の開発に向けた努力、およびそれらのための研究協力関係の構築を目的としています。今回は5名の招待講演者による講演を中心に研究会を開催いたします。

プログラム：

- 及川武久(筑波大)  
「GAIM研究会の10年の歩み」

2. 谷 誠 (京大院農)  
「半島マレーシア熱帯雨林における蒸発散特性」
3. 井口敬雄 (京大防災研)  
「グローバル数値モデルを用いた大気中二酸化炭素の収支の研究」
4. 中田淳子 (岐阜大流域圏研究センター)  
「岐阜大学COE『衛星生態学創生拠点』～中部山岳地帯における観測と陸面モデルの開発」
5. 風岡 亮 (京大院理)  
「日本付近に到達する空気塊移動の特徴について」

世話人：馬淵和雄 (気象研)，大谷義一 (森林総研)，青木輝夫 (気象研)，西田顕郎 (筑波大)，伊藤昭彦 (環境研)

代表連絡先：馬淵和雄 (気象研)

E-mail : kmabuchi@mri-jma.go.jp

## 気象教育懇談会

気象学は最も身近な自然科学の一つであるとともに、自然環境にも密接に関係し、21世紀の自然科学教育において重要な位置を占めています。そこで、気象学に関わる教育やアウトリーチについての問題を考える場として、昨年からは気象教育懇談会を開くことに致しました。学校教育に限らず、研究者、気象業務担当者、高等教育関係者にお集まり頂き、情報交換ができればと考えております。本年は「気象関係画像とその教育利用」というテーマで、下記の要領で実施致します。

日時：2007年5月13日 (日) (大会第1日) 17:00～18:30

場所：大会D会場

テーマ：「気象関係画像とその教育利用」 気象現象を捉えた映像をどのようにして教育に利用するのが有効か、地上と衛星の事例から考えてみます。

話題提供者およびその概要：

- ①武田康男 (東葛飾高) 「気象現象の撮影とその教育利用について」 教育の場で気象を教える場合、気象画像の利用はとても効果的です。その画像は教育者自ら観測して撮影することができます。さまざまな雲や空、気象光学現象など、身近に題材がたくさんあります。これまでに私が小学校から高校までの授業や大人向けの講座等で

用いた、自ら撮影した画像や映像を紹介し、その観測・撮影の方法や学校現場での活用の様子を提示します。

- ②浅野準一 (気象大) 「リアルタイム気象衛星画像の利用法」 昨今インターネット等の発達で、気象衛星画像の入手は格段に便利になりました。しかし、日時や撮影領域を特定して入手することは難しく、例えば『気象衛星観測月報』の発行を待たなくてはなりません。一方で、欧米に目を転じてみると、地球観測衛星等の観測データがふんだんに、しかも無料で公開されています。しかし、これらのデータを取り扱うにはプログラミングについて一定のスキルが必要で、教育の現場で手軽に利用するにはやや敷居が高いと思われます。今回の懇談会では、雲画像解析プログラムセットSATAIDを使った気象衛星画像の表示や、前線等の描画・解析方法について紹介し、実際の教育の場での気象衛星画像の活用を参加者の皆さんと探っていければと考えています。

問い合わせ先：畠山正恒 (聖光学院中学高等学校)

E-mail : hatakeya@hotmail.com

## オゾン研究連絡会

日時：2007年5月15日 (火) (大会第3日) セッション終了後から2時間以内

場所：大会B会場

内容：今回は、成層圏・対流圏オゾン研究の第一人者である NCARのBrasseur氏に、将来の方向性も含めたオゾン研究のレビュー的講演をして頂けることになりました。関心をお持ちの方はこの機会に是非お集まり下さい。

題目：Atmospheric Ozone, Yesterday, Today and Tomorrow (予定)

講演者：Prof. Guy Brasseur (NCAR)

世話人：笠井康子 (NICT)，川上修司，河本 望 (JAXA)，永島達也 (環境研)，庭野将徳 (FRCGC)，村田 功 (東北大院環境科学)

連絡先：村田 功 (東北大院環境科学)

TEL : 022-795-5776, FAX : 022-795-5775

E-mail : murata@pat.geophys.tohoku.ac.jp

## 保育施設幹旋について

今大会では、保育施設をご用意しております。大会ホームページ (<http://msj2007.jtbcom.co.jp/>) の保育案内をご覧の上、5月7日までに申し込みください。不明な点や急な問い合わせの場合は、電子メールをkisho-07@ccsr.u-tokyo.ac.jpまでお送りください。

## 非会員による大会での継続的な講演について

最近、非会員のままで継続して大会での講演を行うケースが少なからず見受けられます。特に教員との共著で講演を行う学生や院生の方が多いようですが、一般の方もおられるようです。大会での講演は気象学会会員としての貴重な権利であり、「共著者に会員がいる場合は非会員の大会での講演を認める」という規定は、あくまでも短期滞在の外国人や他分野の研究者が気象学会において一時的に講演を行う場合の特例です。これまでもお願いしてきましたが、気象学会において継続的に講演を行いたい場合には会員になって頂くように強く望みます。

## 秋季大会の予告

2007年度秋季大会は、2007年10月14日 (日) ～16日 (火) に北海道大学 (札幌市) で開催される予定です。